原 著

分娩介助場面における助産師学生の 熟練助産師からの学び

The learning of midwifery students from expert midwives in the delivery setting

谷 津 裕 子 (Hiroko YATSU)*

要 約

目 的

助産師教育のあり方を探る一助として、分娩介助場面における助産師学生の熟練助産師からの学びを明らかにする。

対象および方法

東京都内の総合病院分娩棟にて実習中の助産師学生4名を対象に、分娩介助後に熟練助産師から学んだことについて自由に語ってもらった。面接の内容を逐語記録し、学生の学びにかかわる内容を質的に分析した。

結 果

学生の学びを特徴づけるテーマ「自分をケアに活かす方法」が導き出された。このテーマは、3つのサブテーマ、1. 相手を尊重すること（「まず相手（産婦）ありき」のかかわり、「その人（産婦）なりの進歩をつかむ」のかかわり）、2. 相手の能力を引き出すこと（「視点を転換させる」のかかわり、「言葉の広さをとらえる」のかかわり）、3. 相手に合わせること（「まず自分（助産師）が落ち着く」のかかわり、「相手の状況を読み、自らの行為を調整する」のかかわり）によって構成された。

結 論

助産師学生は、個々の産婦の状況に適したケアを提供していく際に、自分をケアに活かすことの重要性は理解できても、実際にこれを行うことは必ずしも容易ではないことから、学生の指導・教育にあたっては、学生が熟練助産師から学んだ体験や内容を確認し、その重要性について学生の認識が深まるような支持・助言を行うことが大切であると考えられた。

キーワード 助産師学生、熟練助産師、出産、ケア、学び

Abstract

Objective

As one way of exploring the pattern of education for midwifery students, this research

* 日本赤十字看護大学 (The Japanese Red Cross College of Nursing)

2002年4月19日受付 2002年11月10日採用

aims to clarify the way in which midwifery students learn from experienced expert midwives in the delivery setting.

Method

The researcher's informants comprised 4 midwifery students undergoing practical training in the Delivery Unit of a general hospital in Tokyo. After assisting with delivery care, they talked freely about what they had learned from the expert midwife.

The interview data was recorded and qualitatively analyzed with regard to the learning content and the learning process in which the students had participated.

Results

"How to utilize oneself for care" was chosen as the main theme that characterized the student learning. This main theme was seen as being composed of three sub-themes:

1. Respecting a woman in labor (as a first priority, coming to grips with the individual existence of the woman in labor, and interacting with her progress during labor).
2. Connecting in such a way as to draw out the ability of the woman in labor (diverting her attention at moments of stress, and grasping the full emotional undertones of her words).
3. Adjusting oneself to the woman in labor (ensuing firstly that one's own feelings are calm and settled, and then monitoring the condition of the woman in labor while continuing to control one's own actions).

Conclusion

In the context of providing care suited to the individual conditions of the women in labor, the midwifery students were able to understand the importance of utilizing themselves for care, but even so, they found it hard to apply this principle in practice.

It follows that in the education and guidance given to midwifery students, it is important to confirm what they have learned from expert midwives in terms of knowledge content and experience, and to devise techniques and forms of advice that deepen students' awareness of the significance of this learning process.

Key Words Midwifery students, Expert midwives, Delivery, Care, Learning

I はじめに

2001年4月、厚生労働省における「健やか親子21」推進協議会が設立され、主要課題の1つである「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保」への取り組みが進められている。その一方で、近年各地で助産師学校の閉校が相次ぎ、助産師のマンパワー確保が急務の課題となっている。こうした現状において、女性自らが選択した妊娠・出産環境で安全で快適な医療・看護を提供するためには、助産師の基礎教育および卒後教育において助産ケアの質を向上させるための工夫が、今後いっそう求められる。特に、助産師が自らの仕事に専門職としての関心や魅力を感じ、自己成長欲求を

刺激されることによって、自発的に専門的判断・実践能力を練磨していけるような教育環境づくりが強く望まれるものと思われる。

助産師教育に関する先行研究は数多く、特に、助産師学生（増田他，1991：小山他，1993：土岐・片山・大沢他，1994：岩木，1996：土岐・片山・衣川他，1997）や新人助産師（三村・中村・中田他，2001）を対象に、彼女らの分娩介助技術の習得状況や思考プロセスを調べた研究が目立つ。岩木は、助産師学生の分娩介助実習における学びの積み重ねに着目し、学生は、自分に不足していると意識した課題を克服しようとして学びを積み重ねていることや、その積み重ねは5つの段階を経て遂行されることなどを明らかにした。また、三村らは、熟練助産師との比較を通して新人助産師

の思考プロセスの特徴を明らかにした。それによると、新人助産師は、場面ごとの情報はとらえられても仮説の検証が遅れるため、切迫感の察知ができず状況判断が鈍るのに対し、熟練助産師は、産婦の特性を踏まえて全体的に状況を判断でき、ゴール（全開大、娩出時期）を見据えた情報の分析や判断を行う。

これらの研究は、学生や新人が助産師としてどのような専門的判断・実践能力を必要とし、それをどのような段階を経て習得するかを知る手がかりとなる。特に三村らの研究では、新人助産師と熟練助産師を比較することにより、助産ケアに必要な状況判断の根拠や対処の特徴が浮き彫りにされた。実際、学生や新人が、熟練助産師のケア実践を目の当たりにすることは、対象に応じた状況判断や対処のしかたを学ぶ好機となるばかりではなく、そこに熟練助産師の助産観や助産の奥深さを垣間見て助産師としての成長欲求を刺激され、専門的技術・実践能力の向上を目指すモチベーションにつながるものと考えられる。しかしながら、これまでの研究では、学生や新人に対する助産師教育に関し、熟練助産師からの学びという視点からアプローチしたものはほとんど見当たらない。

そこで本研究では、分娩介助場面において、助産師学生が熟練助産師から学んでいることを明らかにすることにより、助産師教育のあり方を探る1つの手がかりとしたい。

II 研究目的

分娩介助場面における、助産師学生の、熟練助

産師からの学びを明らかにする。

III 用語の定義

1. 助産師学生：助産師としての臨床経験がなく、助産師養成機関に在籍し、分娩期の判断・ケアに関する実習（以下、分娩介助実習と略す）を行っている学生。
2. 熟練助産師：助産師としての臨床経験が10年以上で、熟練しているとチームから評価されている助産師。
3. 学び：学生によって「わかる」「気づく」等の言葉によって表現され、物事の見方や考え方を知り、理解したとされる現象。

IV 研究方法

1. 研究対象者

東京都内の某総合病院附属助産師学校に在籍し、研究への協力が得られた助産師学生4名。年齢は23～26歳（平均24.8歳）、看護師としての臨床経験は2～4年（平均3.3年）であった。

2. データ収集期間

1999年10月～12月

3. データ収集方法

本研究でデータ収集を行った施設では、助産師学生の分娩介助実習にあたり、原則として各事例ごとに「振り返り」の場が設けられる。研究者は、研究対象者および学生にかかわった熟練助産師の

表1 本研究で検討した事例一覧

事例 No.	初／経産婦別	学生 No.	助産師 No.	事 例 の 概 要
1	初産婦	A	E	分娩第1期、陣痛に対する不安が強く、呼吸法が思いどおりにできずにパニック状態を来した産婦の事例。
2	1経産婦	B	E	分娩第1期～第2期、急速な分娩進行に絶叫し転げ回って対処した産婦の事例。
3	初産婦	C	F	分娩第1期、懸命に呼吸法を行い、過換気症状を来した産婦の事例。
4	初産婦	B	F	分娩第1期、子宮口全開大前に強い努責感を訴えた産婦の事例。
5	1経産婦	D	E	順調な分娩進行で落ち着いて分娩に至った産婦の事例。

許可を得て、学生と助産師による「振り返り」に同席し、その内容を筆記または録音した。その後、助産師学生に面接を行い、「振り返り」から感じたこと、考えたことを自由に語ってもらった。なお、当該事例の分婎進行の把握にかかわる情報（外来カルテ、母子健康手帳、パルトグラム等）については、師長、研究対象者、熟練助産師ならびに当該産婦に対し、その趣旨を説明し、許可を得て収集した。本研究で検討した、学生と熟練助産師の受け持ち事例の一覧を、表1に記す。

4. データ分析方法

1) 個別分析

「振り返り」や助産師学生との面接の内容を逐語記録し、学生の学びにかかわる内容を各事例ごとに抽出した。その際、分婎介助場面における助産師学生と熟練助産師の判断・行動の相違に着目し、学生の自己成長にかかわる学びの内容を分類・整理した。

2) 全体分析

個別分析の学生全員分の結果を照合し、共通する要素を「学生の学びのテーマ」として帰納的に抽出した。その後、テーマをデータの内容と照合し、適合しない記述がある場合は、その背後にある意味を再検討し、テーマを再構成した。

なお、データの分析過程では、助産学の専門家からスーパービジョンを受けるとともに、研究対象者および学生にかかわった熟練助産師へもそれぞれ許可を得た上で適宜内容を提示し、フィードバックを受けて分析の妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

助産師学生、熟練助産師、産婦から得られたデータは本研究の目的だけに用い、すべて匿名で処理すること、研究対象者の意向により研究協力を途中で辞退しても対象者に不利益になるようなことは一切ないことを説明し、厳守した。また、個人名が特定できる情報資料（録音内容など）については、匿名処理した後、これを速やかに消去した。

V 結 果

分析の結果、助産師学生の熟練助産師からの学びを特徴づけるテーマ「自分をケアに活かす方法」が導き出された。「自分をケアに活かす方法」とは、個々の産婦の状況に適したケアを提供していく際に、助産に関する理論的・専門的知識のみに頼るのではなく、助産師自身の感覚や感情、存在感を活用することの意味やその方策について、学生が熟練助産師から学んだ事柄を意味している。

このテーマは、「相手を尊重すること」、「相手の能力を引き出すこと」、「相手に合わせること」という3つのサブテーマから構成された。

1. サブテーマ：相手を尊重すること

学生は、分婎にあたり産婦が心の拠り所としていたり、産婦がその時々を示す個別・固有なニーズを、熟練助産師が敏感に察知し、あらゆる状況下でその拠り所やニーズを支持・尊重するかわりを行っていることを学んでいた。学生が学んだ熟練助産師の“相手を尊重すること”の方策には、「まず相手（産婦）ありき」、「その人（産婦）なりの進歩をつかむ」かわりが挙げられた。

1) 「まず相手（産婦）ありき」のかわり

学生は、産婦が心の拠り所とするものを把握しながらも、そのニーズを教科書的な知識に当てはめがちとなり、そこからはずれそうになると産婦を理想の状態に修正しようとしたこと、その結果、産婦の不安・緊張が高まると同時に、その状況が学生自身のストレスにもなり、産婦のニーズに対処できなくなるという悪循環がみられたことを語った。また、それに対し熟練助産師は、産婦のニーズを型にはめず産婦に合ったしかたで対応することで、結果的に産婦の「頼みの綱」を断ち切らない個を尊重したかわりができていたことを学生は知った。まず相手（産婦）あつてのケアであり、対象を型にはめることは順序が逆なのだということを学生は学んでいた。

「この方は痛みに弱いと自分でもおっしやつていて、それを乗り切るために呼吸法が頼みの綱になっていたみたいで。（中略）収縮が強くなるにつれて産婦さんが取り乱してしまつて、私もすぐ

く慌ててしまったんですね。それで、私が何かしなきゃだめだって、呼吸法の誘導すればいいと自分で思って、張りがおさまってきたときに、『今おさまっているの、呼吸法は、一回大きく息について普通の呼吸に戻しましょう』って言ってたんです。けども、本人はなかなかそれができなかったんですね。(中略)でも「振り返り」で助産婦さんに、それが彼女の呼吸法だったんじゃない？って言われて。その人のお産の流れとペースで呼吸法って変わってくる、まず対象があって初めて呼吸法が成り立つんだっていうこと、対象を型にはめたら逆なんだということ。それはもっともだなあとって」(事例1／学生A)。

2)「その人(産婦)なりの進歩をつかむ」かわり

学生は、分娩の進行に伴って産婦が自分なりに体の変化を受容し次のことに目を向けることができるようになるという、その人なりの進歩を的確にとらえることの大切さについて語った。助産師が産む人の感覚を重視したうえでその人が感じていることを感じ取り、かつ、出産への取り組みの転換が起こっていることを見るという視点で産婦にかかわっていたことを、学生は学んでいた。

「それまで転げ回ったり絶叫していた産婦さんが、真顔に戻って『あの一、お尻、いきみたい感じがあるんですけど、いきんでいいですか？』って聞いてきたんですね。その時初めて、しっかりした会話を聞いたような気がして。(中略)そこで助産婦さんは、排臨近い状態になってむしろ落ちついてきたんだろうと、経験的な勘？で思ったそうです。で、それは、産婦さん本人が、自分なりに体の変化を受容して、次のことに目を向けることができるようになってきたっていう、その人なりの進歩があったんじゃないかと、そういう視点で産婦さんに(助産師が)かかわっていたことを、「振り返り」で気づきました」(事例2／学生B)。

2. サブテーマ：相手の能力を引き出すこと

学生は、産婦が自らの分娩に取り組む過程において、熟練助産師が“相手(産婦)のもつ能力を引き出すこと”，すなわち、産婦が自ら心身の調子を整え、主体的な行動をとれるようにするため

のかかわりを行っていることを学んでいた。学生が学んだ熟練助産師の“相手の能力を引き出すこと”の方策には、「視点を転換させる」、「言葉の広さをとらえる」のかかわりが挙げられた。

1)「視点を転換させる」かわり

学生は、産婦が心身ともに強度の苦痛を強いられる分娩期において、懸命に分娩に取り組む産婦のペースに巻き込まれ、望ましい援助の方向性を見失うことがあった。さらに、そのことが産婦の疲労や緊張を助長させ、分娩経過を阻害するという悪循環を生じさせていた。一方熟練助産師は、産婦に対して違うことに目を向けさせ、分娩への新たな取り組み方を提示して、疲労や緊張の悪循環を断ち切り、産婦の心身の調整力を引き出すかわりを行っていたことを、学生は学んでいた。

「(産婦が)呼吸法を一生懸命にやりすぎて、過呼吸になっちゃって、私もそれを見て、一生懸命軌道修正しようとかだわっちゃったんですけども、(助産師は)吐き気がおさまったら一回お水を飲んでみない？とか、一回ちょっと立ってみようか？とか、そういうふうにかかわっていたんですね。それが、本人の気分を換えて、普通の呼吸に戻っていったっていう。(中略)あのかかわりは、産婦さんに違うことに目を向けさせて、緊張をふと忘れさせるためのかわりだったことが、あとでわかったんです」(事例3／学生C)。

2)「言葉の広さをとらえる」かわり

学生は、理論的・専門的知識に準拠して分娩に対処しようとするあまりに、産婦が発する言葉を狭い意味で受け取り、産婦のニーズを的確にとらえきれなかったことがあった。またそのことが、産婦の思考や行動を抑圧し、分娩進行を阻害する一因となっていた。これに対し熟練助産師は、産婦の言葉に含まれる感情や意図されている行動も含めてその言葉の意味を広く汲み取り応じることで、産婦を抑圧しているものを解き放ち、産婦が自ら主体的に行動するための援助を行っていたことを、学生は学んでいた。

「(産婦から)『いきんでいいですか？』『いつになったらいきんでいいんですか？』ってすごく聞かれたときに、自分ではすごく迷ったんですけど、そばにいた助産婦さんが、『いきんでもいいけど、そんなにがむしゃらにはしないだね』って言った

んです。(子宮口が)全開前なのにどうしてだろうと思ったんですけど、産婦さんからお話を聞くと、いきんでいいと言われたことで、その方が、自分をおさえていたものが外に出せるようになった。考えることなく自分の行動がとれることにつながったと。実際、(産婦は)そのあと落ち着かれて、ゆっくり、上手にいきみをいれていらっしかったです。(中略)いきんでいいよって言われても、そんなにがむしゃらにいきまない、私たちはすごく力を入れることを想像するんですけども。やっぱり、その(産婦の発する)言葉の広さをとらえてあげなきゃっていうことを“振り返り”から気づきました」(事例4／学生B)。

3. サブテーマ：相手に合わせること

学生は、ダイナミックな分娩経過に伴い苦痛や疲労を呈する産婦に対し、熟練助産師が産婦との結び付きを念頭におき、自らの存在感を活用しながら産婦の安寧、すなわち安全・安心・安楽を確保するすべを、「振り返り」を通して学んでいた。学生が学んだ熟練助産師の“相手に合わせること”の方策には、「まず自分(助産師)が落ち着く」、「相手の状況を読み、自らの行為を調整する」かわりが挙げられた。

1)「まず自分(助産師)が落ち着く」かわり

学生は、産婦の緊張や苦痛に巻き込まれ、援助者として為すべきことを見失って動揺したり、居心地の悪さを感じてその場を離れがちになったりすることがあった。これに対し熟練助産師は、そうしたかわりこそが産婦の緊張や苦痛を助長することを念頭におき、まず助産師自身が落ち着くことが重要であり、産婦の経過をアセスメントしながら自分が落ち着くために何をすべきかを考え行動することの大事さを学生に伝えた。

「詰め所に戻って助産婦さんに、『収縮のたびに泣くんです』『すごい騒がれてて、私どうしたらいいのかわからないんです』って言ったら、助産婦さんは『どうにかしなきゃいけないもんかね?』とひとこと言ってくれて。あ、どうにかしようと思わなくていいんだ、それならちょっとできるかなと思って。『まず私が落ち着かなきゃだめですよね』っていう感じで確かめるように言ったら、『それ、わかってるんでしょ?』って、「すごく順

調(な分娩進行)だもんね』っていう感じで言われて。(中略)自分で経過がわかって、自分が落ち着くことができないければ、産婦さんを落ち着かせることはできないっていうことを(助産師から)教えてもらったと思うんです」(事例1／学生A)。

2)「相手の状況を読み、自らの行為を調整する」かわり

学生は、分娩を安全に進行させ、産婦に安楽を与えるための援助の手がかりとして、チェックリストのようなマニュアル化された指標を求めたが、熟練助産師はむしろマニュアル化できない自分自身の感覚や気づきの部分に、個としての産婦への対応や状況判断の手がかりが隠されていると認識していることを学生は学んだ。しかし、その状況を読み、産婦を取り巻く雰囲気を感じて助産師自身の行為を調整していくことの重要性は理解できても、実際にこれを行うことは学生にとって必ずしも容易ではないものとして語られた。

「助産婦さんがいきなり『(産婦を)分娩室に案内して』って私に言って。まだ収縮も強くないし、どうして急に?って思って、あとから(助産師に)聞くと、『(予備室では産婦が)居心地良さそうじゃなかったもの、(分娩室に)入っちゃったほうが安心するような気がしたの』って言うんですね……。 (中略) 私なんかはほんとうにルーティンみたいにこの時期に分娩室に入れるとか、ある一つの目安をつけてそれが見えたら準備をすることかかって思ったりしているんですね。それ以外の場合っていうのはすごい不安……。今の私には、助産婦さんのように、その人の状況を読んで、雰囲気を察して行動したり、その場にとどまったりするっていうことはできないと思うんですけど、そういうことが大事だっていうのはすごい理解できました」(事例5／学生D)。

VI 考 察

本研究では、分娩介助実習において助産師学生が熟練助産師から学んだこととして、「相手を尊重すること」、「相手の能力を引き出すこと」、「相手に合わせること」があることを明らかにした。それらの学びは、分娩の「型」ではなく「まず相手(産婦)ありき」のかわり、「その人(産婦)

なりの進歩をつかむ」かわり、産婦の「視点を転換させる」かわり、「言葉の広さをとらえる」かわり、「まず自分（助産師）が落ち着く」かわり、「相手の状況を読み、自らの行為を調整する」かわりといった、熟練助産師の産婦への働きかけの特徴をとらえたものであり、個々の産婦の状況に適したケアを提供していく際に、助産師である「自分をケアに活かす方法」について、学生が体験を通して学び得た内容であった。

以下に、分娩介助場面における助産師学生の、熟練助産師からの学びの体験とその内容についてそれぞれ考察する。

1. 助産師学生の学びの体験について

これまで助産師学生を対象とした研究では、分娩介助技術の習得状況や思考プロセスを段階を追って調べるものが多く（岩木、1996：増田他、1991：土岐・片山・大沢他、1994：土岐・片山・衣川他、1997）、度重なる分娩介助の体験が学生の技術や思考の向上に正の影響を及ぼすことが明らかにされている。しかしながら、そのプロセスにおいて、学生が実際にどのような体験をしているかという問題については、ほとんど明らかにされていなかった。

本研究の結果は、こうした問題に対し新たな知見を提供するものと思われる。臨床経験の浅い看護師または助産師が、推論的思考の欠如を補うかたちで看護診断や介入のプロセスをガイドラインどおり進めていこうとする傾向があるという報告（Benner, 1984/1992：三村・中村・中田他、2001：寺坂、1997）と同様、本研究でも助産師学生は、産婦の状況を既成の尺度に照らしてアセスメントし、枠外にはみ出るケースに対しては強い緊張や動揺、時には拒絶感のようなものを抱いて、産婦へのかかわりを困難なものにしていた。本研究が明らかにしたのは、そうしたかかわりの困難さの原因や、それを克服するための視点と方策を、熟練助産師の産婦へのかかわりを通して学生が学んでいるということである。

熟練助産師の技は高度に複雑で状況依存的であり、それを簡単に真似たり言語化して他者に伝授したりすることは非常に難しい。しかしながら、まだ助産経験の浅い学生が、そのフレキシブルな

技に通底する原則的な要素、個々の産婦の状況に応じて自己を活用するための視点や方策を鋭く見抜いている点は興味深い。

ここで見逃してはならないのは、これらの学びを得る過程で、学生が産婦へのかかわりに戸惑いや困難を感じた場面を自分自身の問題として体験し、その解決への手がかりとして熟練助産師のかかわりをとらえ返していることである。岩木（1996）は、臨床場面での助産師学生の学びについて、理解できなかったことを克服しようとして学習の動機づけが生じていることを明らかにしたが、本研究でもこれを支持する結果が得られたものと考えられる。

またこのことは、学生を指導・教育するにあたり、学生が何をどのように「できた」という到達度を確認・評価するばかりでなく、学生が「できなかった」ことについてその時々感情や体験を学生自身が深く内省し、新たな洞察を得る場を提供することが大切であることを示唆するものと思われる。学生が、指導者からのフィードバックを受けながら、1つ1つの事例を丁寧に振り返ることができる実習体制について、臨床で指導にあたる助産師や教員間で十分に検討することが必要であると考ええる。

さらに、本研究の対象となった学生は、助産師である「自分をケアに活かす方法」について、出産までのプロセスを産婦と熟練助産師と共に歩み、かわり合う体験を通して学びへと変えていた。人間対人間の関係性の中で知識と技術をもった自分をケアする人間としてどのように位置づけていくかということについて、学生が実践を通して学びを得ていることは、実践の中の知を重んじるこれからの専門家教育の在り方（Schön, 1983/2001）を示唆するものと思われる、興味深い。学生は、熟練助産師が個々の場所や時間の中で、対象の多義性を十分に考慮に入れながら、それとの交流の中で事象をとらえる方法を学んでいたものであり、そのような学びは、学生自身が身体を備えた主体として、他者からの働きかけを受け止めながら振る舞うこと、すなわち真の意味での経験（中村、1992）を通してこそ得ることができるものと考ええる。複雑性や不確実性を有する実践状況を改めて学びの場としてとらえ直し、相手とかわる

中で学びが広がり深まること、すなわち How to learn を学ぶことの重要性を、学生と助産師、教員がおのおの自覚して学習および指導にあたるのが今後の助産師教育には求められるものと思われる。

2. 助産師学生の学びの内容について

1) 相手を尊重すること

助産師は「女性と共にある」専門職として、つねに産婦の個性や多様性を理解しそのニーズに応じた適切なケアを提供する役割を担うことは、日本助産学会がまとめた『日本の助産婦が持つべき実践能力と責任範囲』(1998)に謳われ、助産師教育機関においても学生は、こうした women centered care の重要性について教授されているものと思われる。しかしながら、産婦を尊重するケアや行為とは、実際にはどのようにすることなのか、どのようにして成り立つものなのかということについては、実際に産婦とかかわる場面で学ぶことが多いものと考えられる。

本研究において学生は、呼吸法への取り組みや産婦の態度など客観的に把握できる情報に目を奪われがちであったが、熟練助産師のかかわりを通して、その情報を個々の産婦のニーズや分娩進行に即して意味づけ、個としての産婦を尊重するケアへと結び付けることの重要性を学ぶことができていた。岩木(1996)は、分娩介助実習を重ねるにつれて助産師学生が、顕著な情報から段階の変化を示す微妙な情報へ、客観性の高い情報把握から主観性の高い情報把握へと把握が可能になる傾向があることを明らかにしたが、本研究の結果は、こうした学びのプロセスが熟練助産師の指導を介入させることにより、いっそう促進させる可能性を示唆するものと考えられる。また、産婦を個として尊重することは、産婦の言動や行動をよく観察し、産む人の感覚を重要な手がかりとしながら、「型」ではなく産婦の「個」に合った分娩経過を支えていくことであることを、実習その他の学習の場で、学生に考える機会を与えることが大切であると考えられる。

2) 相手の能力を引き出すこと

産婦が自らの分娩に取り組む過程において、産婦の気力と体力を蓄え、分娩への満足感を高める

ためのケアは重要であり、特に、産婦のもつ“能力を引き出すこと”、すなわち産婦が自ら心身の調子を整え、主体的な行動をとれるようにするためのかわり、分娩期における助産師の重要な役割の1つである。

本研究において学生は、分娩経過が滞っていたり、逆にとめどもない努責感が発来するような切迫した場面において、理論的・教科書的な知識に準拠して対処しようとした。が、助産師が、産婦の目を別のことに向けさせたり、産婦の発する言葉を言外の意味まで含めて広くとらえたりすることによって、産婦の心理的な閉塞感を解消し(「自分をおさえていたものを外に出」し)、産婦の行動に自由さや主体性を蘇らせる(「考えることなく自分の行動がとれることにつなぐ」)ことが可能となることを学んだ。

山本・村本(1992)は、助産師の言葉かけや態度が産婦の満足感に直接的に影響するのではなく、その援助の結果、対象がどのように行動できたかが重要であり、対象にとって主体的で納得できる行動に結び付いた時に初めて、助産師のケアを満足な分娩への援助と感じると述べている。実際の介助場面において、産婦が自ら心身の調子を整え、主体的な行動をとれるようにするためのかわり、産婦の視座に立った分娩への援助の重要性や具体的方策について学生が学び得ることは大きく、実習後もそこで得た体験を演習やレポートの場で活用し、学びを深めることが大切であると考えられる。

3) 相手に合わせること

ダイナミックな分娩経過に伴い苦痛や疲労を呈する産婦に対し、助産師が産婦との結び付きを念頭におき、自らの存在感を活用しながら産婦の安寧(安全・安心・安楽)を確保するためには、助産師の専門的な知識や判断、技術のみならず、他者の気持ちや他者が置かれた状況を理解し不確実な状況に耐えつつ他者を支持・支援する、助産師の人間としての豊かな感性や精神的な強さが必要とされる。

本研究において学生は、産婦の安寧を確保するために助産師自身がまず落ち着き、自らの感覚や感情、存在感を活用しながら状況を判断し対応することの重要性を、助産師の産婦へのかかわりを

通して学んでいた。しかし同時に、実際にこれを行うことは学生にとって必ずしも容易ではないことが、学生の語りからうかがえた。看護は、看護者と対象者の相互交流的、相互主観的な関係によって成り立つ活動であり、看護を行ううえで看護者自身の存在を活用することは不可欠であっても (Paterson & Zderad, 1976/1983: Rose & Parker, 1994), それを体現し、自立して判断・予測・行為するためには少なく見積もっても卒業3年以上、約5年を要するといわれている (池内, 1999)。したがって、指導的・教育的立場からは、分娩介助場面における助産師学生の、熟練助産師からの学びの体験や内容を確認し、その重要性について学生の認識が深まるような支持・助言を行うことが大切であると考えられる。

VII 本研究の限界と今後の課題

本研究は、一病院における少数の助産師学生と熟練助産師を対象とし、分娩介助場面における学生の学びについて探究した。また、本研究で対象とした学生は看護師として2年以上の臨床経験を有することも、本研究の結果に何らかの影響を及ぼしたと考える。そのため、本研究の結果を一般化するには限界があると思われる、より多くの事例を踏まえて本研究の結果を洗練することが今後の課題である。

VIII 結 論

本研究では、助産師教育の一環として行われる分娩介助実習のあり方を探る手がかりとして、分娩介助場面における助産師学生の熟練助産師からの学びを探究した。その結果、学生の学びを特徴づけるテーマ「自分をケアに活かす方法」が導き出され、さらにこのテーマは、3つのサブテーマ、1. 相手を尊重すること (「まず相手 (産婦) ありき」のかかわり, 「その人 (産婦) なりの進歩をつかむ」かかわり), 2. 相手の能力を引き出すこと (「視点を転換させる」かかわり, 「言葉の広さをとらえる」かかわり), 3. 相手に合わせること (「まず自分 (助産師) が落ち着く」かかわり, 「相手の状況を読み、自らの行為を調整する」か

かわり) によって構成された。

本研究の結果から、助産師学生の分娩介助場面における学びの体験やその内容の特徴が明らかになり、指導・教育への視座が与えられた。すなわち、学生が学びを得る過程では、学生が産婦へのかかわりに戸惑いや困難を感じた場面を自分自身の問題として体験し、その解決への手がかりとして熟練助産師のかかわりをとらえ返していることから、学生が「できなかった」ことについてその時々感情や体験を学生自身が深く内省し、新たな洞察を得る場を提供することが大切であると考えられた。また、個々の産婦の状況に適したケアを提供していく際に、助産師自身の感覚や感情、存在感を活用していくことの重要性は理解できても、実際にこれを行うことは学生にとって必ずしも容易ではないことから、学生の指導・教育にあたっては、分娩介助場面における助産師学生の、熟練助産師からの学びの体験や内容を確認し、その重要性について学生の認識が深まるような支持・助言を行うことが大切であると考えられた。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力くださいました助産師と助産師学生、産婦の皆様は心より感謝申し上げます。

文献

- Benner, P. (1984)/井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳 (1992), ベナー看護論: 達人ナースの卓越性とパワー, 東京, 医学書院.
- 池内佳子他 (1999), 新卒看護婦の援助技術の自立過程からみた看護教育の検討, 第19回日本看護科学学会学術集, 12.
- 岩木宏子 (1996), 助産婦学生の分娩介助実習における学びの積み重ねについて: 学生の視座に基づく学びの積み重ねのプロセス, 日本助産学会誌, 10(1), 36-45.
- 小山都余子他 (1993), 分娩介助実習における10例の妥当性の検討 (第1報), 技術チェックリスト評価表にみる技術面の習得状況, 母性衛生, 34(2).
- 増田尚子他 (1991), 助産婦学生の卒業時における分娩介助技術の到達度, 第22回日本看護学会集録, 看護教育, 235-237.
- 三村あかね, 中村友恵, 中田みどり他 (2001), 分娩第1期における新人助産婦と熟練助産婦の思考プロセスの比較, 日本助産学会誌, 14(3), 74-75.
- 中村雄二郎 (1992), 臨床の知とは何か, 岩波書店.
- Paterson G. & Zderad L. (1976)/長谷川浩・川野雅資訳 (1983), ヒューマンスティック・ナーシング, 医学書院.

- Rose P. & Parker D. (1994), Nursing: An Integration of Art and Science within the Experience of the Practitioner, *Journal of Advanced Nursing*, 20, 1004-1010.
- 寺坂貴子 (1997), 臨床における看護診断導入の効果的な学習の進め方, 日本看護科学学会誌, 17(2), 26-27.
- Schön D. (1983)/佐藤学・秋田喜代美訳 (2001), 専門家の知恵: 反省的実践家は行為しながら考える, ゆみる出版.
- 土岐初恵, 片山春代, 大沢豊子他 (1994), 助産婦学生
の分娩介助技術の習得状況: 分娩介助場面の技術と思考過程, 日本助産学会誌, 7(2), 78-81.
- 土岐初恵, 片山春代, 衣川さえ子他 (1997), 助産婦学生の分娩介助技術の到達度: 分娩介助場面における思考過程と技術の到達度の関連性, *Quality Nursing*, 3(10), 63-69.
- 山本真由美, 村本淳子 (1992), 産婦の感じる「満足な分娩」を考える—初産婦へのインタビューを通して—, 神奈川県立看護教育大学校看護研究集録, No. 17, 121-126.